〃車イスで歩ける街づくり運動〃は、そのための必死の第一歩であることを是非とも認識して戴きたい。

（青い芝の会）

――長塚　節にみる――

土浦の川口

平　輪　光　三

長塚　節の初期の短歌作品に、霞ケ浦を詠んだ八首がある。明治三十四年、節二十三歳当時のもので、正岡子規の門下に入って萬葉集をさかんに勉強していた時代のものであるから、まだ節独自の個性的なものはないが、さすがに調った萬葉ぶりの歌である。

「常陸の国霞が浦に舟を泛べてよみける」と前詞があるものだが、八首のうち四首を抄する。

芦の辺をこぎたみ行けば思ほゆる
　妹と相見の埼近づきぬ

沖の辺にい行きかへらふ蟹舟は
　若鷺捕らし秋たけぬれば

白波のひまなく寄する行方の
　三崎に立てる離れ松あはれ

いさり舟白帆つらなめこぐなべに
　味村騒ぎ沖に立つ見ゆ

何れも形式美のととのった優れたものである。現在のごみごみした霞ケ浦周辺の環境からは、こんなゆったりとした歌は生まれて来ないような気がする。

長塚　節は、歌を詠むために、このときも特に舟を頼んで霞ケ浦に遊んだのであるが、明治三十七年に発表した、これも初期の写生文「土浦の川口」は、当時、川口にあった三味線屋（後の土浦館、現在転業）の二階に泊って、十一月の寒風の中を、舟をやとって霞ケ浦に漕ぎ出し、月を見た夜のことを書いたものである。

この写生文は、夜の霞ケ浦の景観や、月の美しさなどについてはあまりふれず、もっぱら頼んだ船頭との会話に重点が置かれて描かれているため、写生文としては物足りないものであるが、船頭が語る公魚をとるダイトク網やその方法、筑波山から吹きおろすナラエのこと、霞ケ浦周辺の稲作やその水害のこと、三味線屋の三階があぶなく吹っ倒れそうになった大風のこと、松が関という石岡出身の相撲取りのことなどが細かに語られている。

当時の三味線屋は、土浦でも珍らしい三階造りの旅館だったが、料理屋も兼ねていたから、女中も大勢いた。そんな旅館に、はたち代前半の、真面目一点張りの節は